

居ないのだ。

『私が悪るう御座んした。もうもうあがいな事は致しませんから、今度の所は何うか勘辨なすつてお許るし下さいませ』

別の聲で、

『お前も酒をのんだり、女を引つ張つたりしたのが悪るいんぢやから、人の物をとつたと言ふではなし、おとなしくしとれば、此處から出してやるからな』

隣りの留置場で、又々刑事が酔つ拂ひを叱つてゐる。

僕の知人の名を言ひ乍ら、殊更刑事が掛けてゐるらしい電話の聲も聞える。

僕の頭はツキツキ病んだ。

雨が降る。

硝子の天窓が閉まる。

自分の足も見えない様な、夜の幕が下りて来る。

様々な妄想が木の葉のやうに飛ぶ。